

大阪商業大学学術情報リポジトリ

英語授業外学習を促す語彙教材の作成

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪商業大学商経学会 公開日: 2018-05-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 前田, 和彦, MAEDA, Kazuhiko メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/508

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



英語授業外学習を促す語彙教材の作成

前 田 和 彦

はじめに

1. サポート学修講座

- (1) サポート学修の受講状況
- (2) 授業方法の変化
- (3) 週毎の反復学習の効果

2. 授業外学習を促進する教材

- (1) 教材開発のきっかけ
- (2) 身近な素材
- (3) 連想方法
- (4) 競争心
- (5) 動機づけ

3. 今後の課題

はじめに

大学生の授業外学習を支援する動きは、多くの大学でも大きな課題となっているのではないだろうか。中学校・高等学校と違い、アルバイトやクラブなどの課外活動に忙しく、自宅で机に向かって勉強する機会は少なくなっているのではないだろうか。ベネッセの生活実態調査（2012）によると、大学生はそれ以外にも、授業外ではテレビやDVDを見たり、インターネットを利用したりするのに多くの時間を費やしているようである。

せっかくのインターネットや、モバイル機器を利用した学習方法も、毎日欠かさず続ける根気強さを持つ学習者は少ないであろう。よほどの目標がない限り、また、よほどの強い意志がない限り、学習者が授業外で勉強するよう促すのは容易ではない。気がつく、授業と授業の間の一週間、英語の教材を持っているにも関わらず、アルバイトやクラブなどで忙しいという理由で復習すらもしていない学習者がいるのが現状である。そのため、一週間前のことでも、授業に出たことやある単語を聞いたことや、書いたことを覚えているだけで、肝心の語彙の意味を記憶していない学習者が実際に存在しているのである。いかに、授業外学習が重要であるかが課題となる。1998年には、国立国語研究所監修の日本語教育専門用語集で、この授業外学習を「自律学習」として次のように定義している。

「自律学習（autonomous learning）とは『学習者自身が自己の学習に主体的に関わり学習を孤立化せず、教授者や教材や教育機関などといったリソースを利用して行う学習』を言う。」（『日本語教育重要語1000』1998）

Holec（1981）も自律した学習者とは、「自分自身の学習を管理する能力を持つ学習者」を指し、「自分の学習のゴールを決め、学習の内容や学習の進め方を決め、その学習に必要な

な教材を選択し、必要な技術を使い、学習の進捗具合をモニターしたり、学習を評価したりすることができる学習者」であると定義している。また、青木（2005）は、自律学習は、「学習者が自分で自分の学習の理由あるいは目的と内容、方法に関して選択を行い、その選択に基づいた計画を実行し、結果を評価すること」と述べている。先行研究（家田2008、梅田2005）によると、自律学習能力は学習者の生まれつきの能力ではなく、教員の指導によって育成すべきものであることが明らかとなっている。青木（2008）も、自律学習には教員の役割が重要であると説いている。

そこで本報告では、学習者にいかに授業外で学習する習慣をつけさせるかを考え、特に英語語彙増強に関してサポート学修講座での学習者の状況、語彙学習法、教材制作にたどり着いた経緯について述べたい。

1. サポート学修講座

(1) サポート学修講座の受講状況

本学では2011年より、「英語に興味がある学生」「英語が苦手な学生」を対象に英語のサポート学修講座「エンジョイ・イングリッシュ」を実施しており、今年度は5年目となる。過去の4年間の受講状況（累計）は次の通りである。

表1

2011年	2012年	2013年	2014年
454名	179名	282名	336名

初年時が2年目を上回っているのは、OBPコース生がTOEICの点数を要求されていたからと思われる。その後はOBPコースがTOEICの点数を進級条件からはずしたため、受講生は減少したが、英語のサポート学修講座受講生数は、毎年着実に増加し、今年度の受講者は12月最後の授業時点において、すでに累計523名となっている。実質数は53名（1回生13名、2回生20名、3回生9名、4回生11名）であることから、継続して受講している学習者が多いことが分かる。受講者は英語が苦手な学習者だけでなく、半年から一年程度の語学留学経験者（2名）や、数週間程度の海外研修経験者（19名）も含まれているので、様々なレベルに対応出来る教材作成に日々努力をしている。

しかしながら、教材を開発し始める3年前までは、授業外での学習はしていないという受講者が非常に多く、授業は楽しんで受講しているものの、成績に伸び悩む受講者も多かった。試行錯誤の結果、2014年に出版することとなった「増やしたもん勝ち英単語」という教材が出来上がり、本学の英語のサポート学修講座「エンジョイ・イングリッシュ」のテキストとして使用することとなったのである。

(2) 授業内容の変化

英語のサポート学修講座「エンジョイ・イングリッシュ」では、最初はOBPコース生が

主だったので、TOEIC に重点を置いた教材を使用していた。しかし、TOEIC 得点の向上には顕著に反映されず、教材開発に工夫し、受講者の希望に出来る限り沿ったもの考えた。

実は、このクラスは英語のサポート学修講座「エンジョイ・イングリッシュ」が始まる1年前に、特にOBPコース生を対象に「TOEIC 勉強会」として始めたのがきっかけであった。そのとき、英語の勉強に目覚めたある一人の学習者が、英語学習に目覚め、授業外でも図書館で長時間勉強し、TOEIC 300点台から半年でTOEIC 800点台という快挙を成し遂げたのである。

英語のサポート学修講座「エンジョイ・イングリッシュ」では留学経験者から、中学校で英語学習につまずいた受講生がいるため、毎回授業に工夫をする必要がある。さらに、先述の学習者のように、いかに学習者たちに自主的に授業外でも学習するよう促すかである。

「英語を話したい」という受講生が多いときは映画のセリフを真似させたり、「書けるようになりたい」という受講生が多いときは英文作成のコツを教えたり、「聞けるようになりたい」という受講生が多いときは音声スピードを調節した教材を用いたり、と極力受講生が楽しみながら学習できるよう工夫を続けてきた。そこで、受講者全員に共通して必要なものが「英語語彙増強」であることに気づき、そのための教材開発に努めたのである。

語彙指導については、多くの教員が頭を悩ませていることであろう。これまでも、文脈を利用する、絵を使用する、語源を活用する、駄洒落を利用する、といった工夫がなされている（相澤、望月2010、池村2002、門田、池村2006、恒石2002）。また、記憶させる方法としても、反復させる、音読させる、例文を作らせる、シャドウイングをさせる、などと様々な方法があるが、最も重要なのは、学習者が「させられ感」を感じるのではなく、自律学習に目覚めることではないだろうか。

英語のサポート学修講座「エンジョイ・イングリッシュ」では、その名の通り、学習者が楽しみながら英語を学べるよう、常に教材を工夫している。しかし、授業に頼り過ぎ、授業外では全く英語に触れない、という学習者も少なくないという状況である。したがって、一週間前に楽しんで学んだことを覚えている受講生の中にも、肝心なことは記憶していない受講生が多々いるというのがこれまでの状況である。

これまでは主に映画やドラマを英語で、しかも字幕なしに理解することの楽しみを伝えるように努力していたが、受講生の語彙力が乏しいことに気づき、受講生が語彙を増やし、さらに授業外でも英語を楽しむようにさせる教材制作に努めたのである。

(3) 週毎の反復学習の効果

反復学習は非常に重要である。堀野、市川（1997）は反復学習の効果を実証している。しかしながら、自主的に反復学習をする大学生の学習者は少ないと言えよう。まして、英語のスローラーナーであれば、授業が精一杯で、自宅で復習する学習者は少ないであろう。本学では中学での英語学習入門期（1年－2年）に英語につまずいた学習者が、69.8%（1回生615名中）であることが2006年の調査（加賀田、小磯、前田、2006）で明らかになり、この数字がこれまでで改善されているとは考えられないことは、現在授業を行っていて実感している。授業では、同じ単語を授業内で数分の間隔を置いて繰り返し学習させているため、そ

の単語を長期間記憶することはあるが、個人指導では効果があると思われるものの、10人を超えると、すでに理解している学習者にとっては退屈な授業となり得てしまう。

毎日の積み重ねがあれば、学習者はさらに語彙力がアップすることは理解しているものの、気がつけば次の週の授業が始まっている、という状況が続いているようである。それは、既出の語彙を忘れている学習者が非常に多いからである。そこで、週ごとの反復学習に効果があるのか、また、何週間ぐらいが適当か、を特に英語スローラーナーを対象に検証した。まず、2週間の反復では効果がみられないと判断し、3週間、同じ語彙問題を使用することとした。語彙は中・高で既習の語彙を多く使用した。3週間同じ問題と同じ説明をしたので、学習者たちは、うんざりしていたが、当然ながら正解率が上がっていった。多くの学習者が3週目で満点を取ったので、それから2ヶ月空け、抜き打ちテストを行い、さらに夏休みをはさんだ2ヶ月後、次の抜き打ちテストを行った。図1、2、3にこれらの結果を示す。

図1において、あまり成績が芳しくないことが分かる。

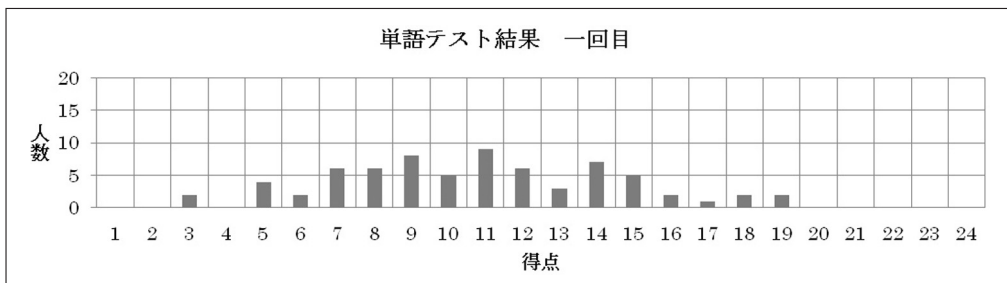


図1 (対象1回目70名)

このテストを予告なしに3週間行い、また、語彙の説明も同様に行った。解答を覚えてしまわないように、次のように問題作成に工夫をした。

例

1. The bird spread its wings.

- (a) つくろった (b) 広げた (c) 羽ばたかせた (d) 震わせた (e) たたんだ

2. The bird flapped its wings.

- (a) つくろった (b) 広げた (c) 羽ばたかせた (d) 震わせた (e) たたんだ

3. The bird folded its wings.

- (a) つくろった (b) 広げた (c) 羽ばたかせた (d) 震わせた (e) たたんだ

4. The bird quivered its wings.

- (a) つくろった (b) 広げた (c) 羽ばたかせた (d) 震わせた (e) たたんだ

過去の経験から、学習者は英語を理解しなくても正解できる方法を見つけてしまう。例え

ば上の例では、1 番の問題だけだと『「鳥」の問題は「広げた」が正答』と記憶し、肝心の語彙の“spread”を記憶したとは言えないのである。答え合わせをするとき、ただ解答を伝えるだけではなく、語幹からの推測方法を伝えた。例えば、“spr-”が「広がるイメージ」、“-fl-”が「上に上がるイメージ」などである。今回のテストでは上記のタイプの問題を6種類、合計24問の語彙テストであった。テスト時間は5分である。

図2は2か月のブランクを空け、予告なしの抜き打ちテストを行った結果である。かなりの学習者に語彙を記憶しているのが分かる。このときは単語の説明はしなかった。学習者たちがお互い何点取れたか競い合っている様子が見て取れた。また、その時に「“spr-”は『広がるイメージ』」等の会話があちこちで囁かれていることも感じられた。

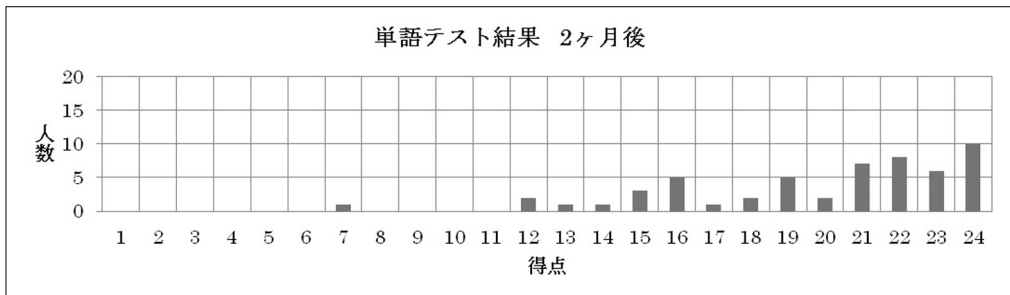


図2（2ヶ月後54名）

図3は、それから夏休みを挟み、前回より2か月経ったあとの抜き打ちテストの結果である。満点取得者が倍近くに増加していることが分かる。

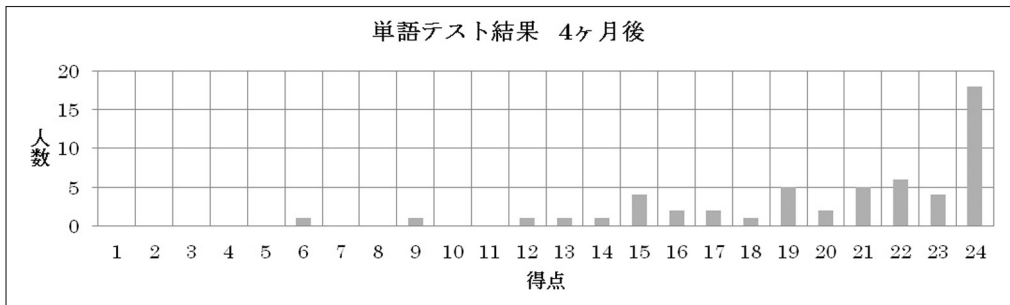


図3（4ヶ月後54名）

前回のテストのとき、満点を取れなかった学習者が今回満点を取ったことから、ある仮説が浮かび上がった。そもそも英語スローラーの多くは、「英語は出来るものに任せておけばいい」という思いが強く、あきらめてしまっているのではないだろうか。したがって、もしこの問題は高校生でも満点が取れると言うと、中学校の時点で英語につまずいた学習者は、逆にやる気を失ってしまうのである。つまり、「自分は中学のレベルでつまずいたのだから、つまずいていない学習者に英語をさせればいい」と考え、出来なかったことが自分の責任であることに気付かない。ところが、身近な学習者、つまり、同じレベルにいる友人が満点を取ったことで、非常に悔しがっていたのが確認できた。ここでの新しく発見された仮

説とは、「自分と同じレベルだと思っていた同級生に負けた悔しさが動機づけとなり得る」ということである。ましてや、「自分の方が同級生より少しは出来ると思っていたのに負けた学習者」には非常に大きな効果があったと思える結果となった。

2. 授業外学習を促進する教材

(1) 教材開発のきっかけ

教材開発のきっかけとなったのは、ある学生が「アルバイトが忙しくて勉強する間がない」と訴えて来たときに、アルバイト先で何を見るのかを聞き、その語彙を英語にしたことである。例えば、ある学生が居酒屋でアルバイトをしていれば、そこで毎日見ているものを日本語で列挙させ、それを授業中にみんなで英語にしていこうという授業も行ってみた。例えば、「はし」「chopsticks」、「なべ」「pan」、「大さじ」「ladle」、「ほうれん草」「spinach」、「大根」「radish」、などである。そして、アルバイト先でも思い出させるよう促すのである。しかし、これはそこでアルバイトをしているものには効果的であったが、それ以外の学習者にはあまり関与性がなく、よって記憶の保持にはつながらなかった。そこで、アルバイトをしていない受講生には、大学に来るまでに目にしたものを出来る限り多く書かせ、同様の授業を行い、帰り道や次大学に来るときには、必ず見ながら復習するように伝えた。すると、ほとんどすべての受講生が「電柱」「utility pole」、「紫陽花」「hydrangea」、「溝」「ditch」、「消火栓」「hydrant」、「信号機」「traffic light」、などの語彙を覚えることができた。しかしながら、この方法でも語彙を劇的に増やす結果には結びつかなかった。

(2) 身近な素材

学習者が目に見えるものを英語にして、次にそれを見たときに思い出させるように促す方法は、当人には効果的であるが、他の学習者には興味がなければその語彙を覚えようとしにくい。感受性が異なるせいか、同じ場所を通っていても、また同じものを見ても、浮かぶ語彙が違う。そこで、更なる工夫を凝らしてみた。次に教材のきっかけとなったのは、学習者にとって非常に身近な素材、つまり「身体」であった。例えば、自分の手だけを見ても、「親指」「thumb」、「指紋」「fingerprint」、「つかむ」「grasp」、など、連想するのは容易ではないかと考え始めたのである。そして、驚くことに自分の手から思いつく限りの語彙を書いていくうち、200以上の語彙が出てきたのである。このような身近な素材であれば、学習者もアルバイト中であろうと、電車に乗っているときであろうと、語彙の反復学習が可能であると考えた。それに、手だけでも200以上の語彙が出て来るのであれば、どんな素材でも連想次第で100以上に増やすことは可能であると考えた。まず、学習者にとって身近な素材、つまり、容易に想像できるものを出来る限り多くの学習者に聞き、それらから連想できる語彙を思い出し続けければ、連想を容易にする方法が見つかると思ったのである。例えば、ある日学習者の一人が「海が好きなので、海に関する語彙で勉強したい」と言ってきた。そこで、「波」「wave」、「潮」「tide」、「さざ波」「ripple」、「大波」「billow」、「イソギンチャク」「sea anemone」、など思いつく限り100以上の語彙をその学習者に伝えると、1週間ほど

で「海」に関する70以上の語彙を覚えた。そのことがきっかけとなり、他の学習者が自分の好きなものを伝えに來たのである。「雪」、「自転車」、「農場」、「文房具」、「舞台」、などであった。最初は思いつく限り100以上書いていたが、それをグループ化していくうち、語彙の連想を容易にする方法が出来上がったのである。

(3) 連想方法

100以上の語彙をグループ分けしているうち、大体7つのグループに分けることが出来ることに気づいた。一つの素材、つまりテーマから、①「素材」の仲間、②「素材」の部分、③「素材」と関係あるもの、④「素材」を修飾する語、⑤「素材」に関する動詞、⑥「素材」を含む言葉、⑦「素材」を使った慣用表現、である。それぞれに対し、こちらで10以上の語彙を用意し7つ答えられれば合格という方法を取り実践してみた。すると、7×7で49語、早い学習者で7×10以上の単語を覚える者が出てきたのである。

次に「犬」をテーマとする例を示す。

例

テーマ「犬」

① 「犬」の仲間

1. 子犬: puppy 2. 猛犬: fierce dog 3. 純血種: purebred 4. 雑種: crossbred
5. 犬科の動物: canine 6. 狐: fox 7. 狸: raccoon dog 8. 哺乳類: mammal
9. 脊椎動物: vertebrate 10. 生物: creature

② 「犬」の部分

1. 牙: fang 2. 鼻と口: muzzle 3. 毛皮: fur 4. 肉球: pad 5. 前足: paw
6. 後ろ足: hind leg 7. 腹: belly 8. へそ: belly button 9. 尻: butts 10. 尻尾: tail

③ 「犬」と関係あるもの

1. 名札: name tag 2. 電柱: utility pole 3. 首輪: collar 4. 口輪: muzzle
5. 飼い主: owner 6. 飼育者: breeder 7. 犬小屋: kennel
8. ペットトリマー: pet groomer 9. トリミングショップ: grooming shop
10. リード: leash

④ 「犬」を修飾する語

1. 元気な犬: cheerful dog 2. 怯える犬: scared dog 3. 人懐っこい犬: friendly dog
4. 賢い犬: smart dog 5. しんどそうな犬: tired-looking dog
6. 悲しそうな犬: sad-faced dog 7. 勇敢な犬: brave dog 8. 優しい犬: kind dog
9. 甘えん坊の犬: wheedling dog 10. 忠誠心の高い犬: faithful dog

⑤ 「犬」に関する動詞

1. よだれをたらす: drool 2. 匂いをかぐ: sniff 3. 舐める: lick 4. 噛む: bite

5. 吠える : bark 6. クンクン鳴く : whine 7. うなる : snarl 8. 遠吠えする : howl
9. 芸をする : do tricks 10. (尻尾)を振る : wag

⑥ 「犬」を含む言葉

1. 犬かき : dog paddle 2. 犬歯 : canine tooth 3. 狂犬病 : rabies 4. 警察の犬 : spy
5. 犬死 : useless death 6. 負け犬 : loser 7. 盲導犬 : seeing-eye dog 8. 猟犬 : hound
9. タヌキ寝入り : fox's sleep 10. タヌキ親父 : sly old man

⑦ 「犬」を使った慣用表現

1. 犬も歩けば棒に当たる : If you act, good luck may come.
2. 犬が西むきゃ尾は東 : That's natural.
3. 犬も食わない : Leave it alone.
4. 犬の遠吠え : to criticize someone behind his or her back
5. 犬猿の仲 : to be on bad terms
6. 飼い犬に手をかまれる : to be betrayed by one's trusted follower
7. 犬に論語 : to waste one's breath
8. キツネにつままれる : to be confused
9. キツネの嫁入り : shower when the sun is shining
10. 捕らぬタヌキの皮算用 : Don't count chickens before they are hatched.

「犬」に関しては、現在の英語のサポート学修講座「エンジョイ・イングリッシュ」の受講者はほぼ全員が合格ラインとしている7割以上、つまり49語以上を英語にすることが出来るようになっている。

この方法を英語のサポート講座「エンジョイ・イングリッシュ」で毎週様々なテーマを使って実行しているうち、学習者たちは競うように自主的に語彙を覚えるようになり、現在テキストとして用いることとなった「増やしたもん勝ち英単語（動物編）（植物編）（人体編）」が完成したのである。この教材は、7つのテーマに対しそれぞれ7つのトピック、そしてそれぞれに10個以上の語彙を紹介している。テーマによっては、電車に乗りながらや、散歩しながらでも短時間で、しかも頭の中で多くの語彙を日本語から英語にすることとも可能なのである。

上記の7つの連想方法に慣れれば、例え教科書がなくても、学習者が普段見るものや想像できる語彙から数倍にすることが可能なはずである。今では携帯電話で容易に意味が検索できるので、この連想方法で思いつく単語でも学習が可能なのである。例えば「階段」"stairs" は、①仲間として「エスカレーター」"escalator"、②部分として「手すり」"handrail"、③関係あるものとして「階上」"upstairs"、④修飾する語として「急な」"steep" ⑤関する動詞として「上る」"ascend" などである。

(4) 競争心

本テキストを使用するにあたり、学習者には自分の好きなものから始めればよいと伝えて

いる。すると、「犬」ではあまり覚えていない学習者でも、「猫」や「鳥」だと7割ぐらいの語句や表現を答えられる学習者が現れ、他の学習者への刺激となり、多くの学習者が自分の得意なトピックから競って覚え始めた。しかも、興味深かったのは、ある学習者が自分の得意なテーマの語彙をうっかり忘れてしまい、悔しい思いをしているときに、別の学習者が正解を言ってしまったのである。悔しさから、その学習者は、自分の好きなテーマの語彙を10割にするだけでなく、別の学習者のテーマの語彙も覚えようと努力を続けた。

競争心、つまりライバル意識は学習する上で、非常に強い動機づけとなり得る（太田2005）。これは、先述の英語スローラーナーのテスト結果からも明らかである。しかし、本学のサポート学修講座「エンジョイ・イングリッシュ」には、留学経験者から中学初期段階で英語学習につまずいた学習者まで、様々なレベルの学習者がいるため、逆に英語スローラーナーが「やっぱり自分には無理」と落ち込まないように、授業内でも配慮が必要であった。幸いしたのは、学習者同士で、「自分も以前は英語が苦手だった」と励ましあう姿を授業内で見ることが出来たことである。

3. 今後の課題

いかに授業外学習を学習者に習慣づけるか、ということが重大な課題であろう。個々の学習者の希望に沿った教材を考えるうち、今回の調査で明らかになったのは、学習者のレベルに関係なく、①学習者全員に合わせ得るテーマ、②それに対する連想法、③競争心を煽る工夫をすることで、英語語彙増強に励む学習者が増加したことである。今後も教材づくりに努力を惜しまず、学習者の「覚えたい語彙」を中心に教材を作成し、学習者たちの競争心を駆り立て、英語に興味・関心を持たせるよう研究を続けたい。

また、反復学習が1週間を経ても3週間続ければ英語スローラーナーにも効果があることが判明したが、テスト対象者がすべて英語に興味を持った訳ではない。このことについても、今後さらなる授業の工夫と教材の改良が必要である。

今回の反省点として、ある学習者は「動物」、ある学習者は「植物」という具合に、学習者が興味を持つ語彙のテーマが違ったため、総合語彙テストを行うことが困難であったことである。

それでも、英語のサポート学修講座「エンジョイ・イングリッシュ」が始まる以前に「TOEIC 勉強会」を実施していたことで、先述のような「TOEIC を半年で500点アップ」を可能とする学習者がいたという事実は「自律学習の有効性を語る」だけではなく、他の学習者への動機づけとなり得るはずである。

今後の課題として、これらの学習者が英語にさらに興味・関心を持ち、授業外でも容易に学習ができるような教材作りに励んで行きたい。

参考文献

- 相澤一美、望月正道（2010）『英語語彙指導の実践アイデア集』大修館書店.
- 青木直子（2005）「自律学習」日本語教育学会編『新版日本語教育事典』大修館 pp. 773-774.
- 青木直子（2008）「学習者オートノミーを育てる教師の役割」『英語教育』 vol.56, No.12 大修館 pp.10-11.
- 家田章子（2008）「自律的な学習を目指す日本語授業の取り組み」桜美林大学.
- 池村大一郎（2002）「語彙力を伸ばす授業の工夫：高校の授業で」『英語教育』12月号、pp.13-5.
- 梅田康子（2005）「学習者の自律性を重視した日本語教育コースにおける教師の役割－学部留学生に対する自律学習コース展開の可能性を探る－」『言語と文化』第12号、pp.59-77 愛知大学語学教育研究室.
- 太田伸幸（2005）「学習場面におけるライバルの有無に影響する要因－競争と学習に対する態度に注目して－」『愛知工業大学研究報告』第40号.
- 加賀田、小磯、前田（2006）「英語学習についての調査研究」『大阪商業大学論集』第144号、pp.13-32.
- 門田修平、池村大一郎（2006）『英語語彙指導ハンドブック』大修館書店.
- 恒石昌志（2002）『語源で増やす英単語』ベレ出版.
- ベネッセ教育総合研究所（2012）「第2回 大学生の学習・生活実態調査報告書」
<http://berd.benesse.jp/koutou/research/detail.php?id=3159>
- Holec, H. (1981) *Autonomy and foreign language learning*. Oxford: Pergamon Press.
- 堀野緑、市川伸一（1997）「高校生の英語学習における学習動機と学習方略」Japanese Journal of Educational Psychology 45 pp. 140-147.
- 前田和彦（2014）『増やしたもん勝ち英単語（動物編）』燃焼社.
- 前田和彦（2014）『増やしたもん勝ち英単語（植物編）』燃焼社.
- 前田和彦（2015）『増やしたもん勝ち英単語（人体編）』燃焼社.